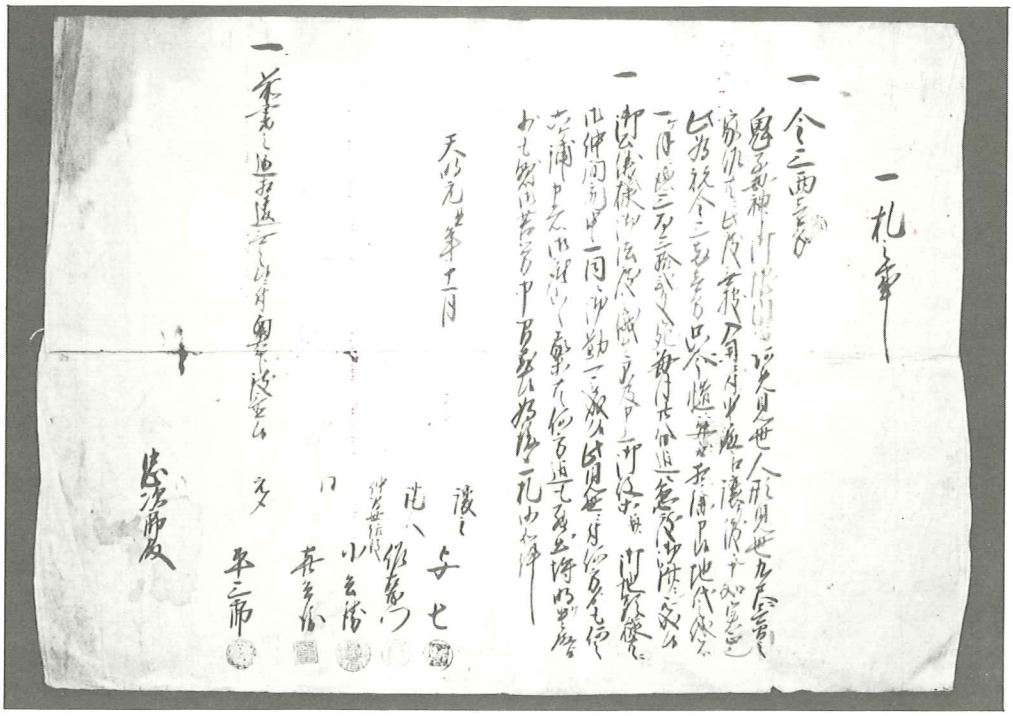
かたりべ 5

豊島区立郷土資料館だより



証文

ぞうしがや名代の飴屋川口屋の所持する天明元年（一七八一）の証文です。

昨年の調査で、この他に天保八年（一八三七）の証文と、近代文書二通が確認されました。

写真の証文によれば、与七が「阿免」（飴）店と「人形」店の権利と家作を忠次郎に金三両一分で売り渡したことがわかります。

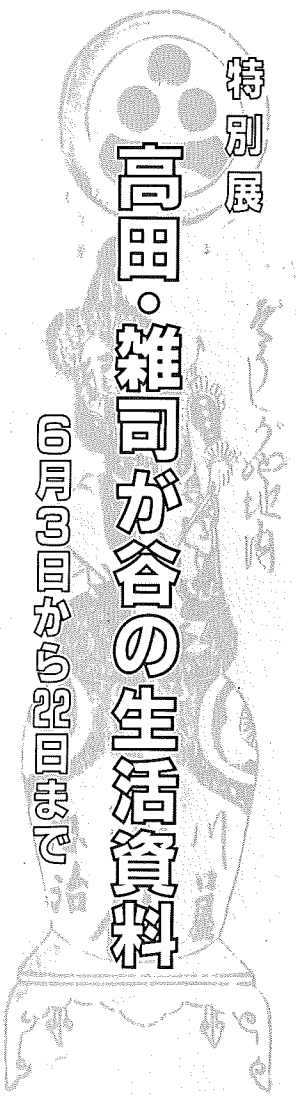
天保の証文では、以前に喜三郎が人形店を買取した際の証文を紛失した旨、世話人に届出、了解を求めています。

これらの証文類から、当時鬼子母神の境内には飴屋だけでなく人形店もあって、その店が度々売買されていたことを知ることができます。

しかし、最も興味深いのは、飴屋川口屋創建にかかわる情報でしょう。天明元年、与七が売却した店が「川口屋」であったかどうかは不明です。しかし、買取した忠次郎は、川口屋の創立者忠次と何らかのかかわりのある者でしょう。また、天保の証文にある世話人忠治が川口屋であることはまず間違いないでしょう。記録に出る川口屋は寛政年間ですから、天明から寛政の間に川口屋が創建されたと思われます。

特別展 高田・雑司が谷の生活資料

6月3日から22日まで



資料館では、一九八五年九月、旧高田・雑司が谷地域に残されている古い生活道具の所在確認調査を行いました。

今回の特別展は、この調査をきっかけに区へ寄せられた資料のうち何点かを展示し、高田・雑司が谷のむかしのくらしを紹介します。

高田・雑司が谷のうつりかわり

この地域は、第一次世界大戦後の一九二〇年代から、東京郊外の住宅地として都市化が進んできたところです。神田川ぞいを中心として工場もでき、その関連の家内工業が発達してきました。それとともに商店もふえていきました。

一方、鬼子母神の周辺は、江戸時代から参詣の人々が多く、商店が集まり、賑わっていました。雑司が谷は、第二次世界大戦で、空襲の被害をまぬかれて焼け残ったところが多い地域です。町を歩いてみても、あちこちに、戦前の町の姿が残されているのを見ることができます。

近代の都市生活いきいきと

このような地域の特色を反映して、高田・雑司が谷には、近代の都市生活で使われた生活用品が、よく残されています。資料館に寄せられたこれらの資料を、「着る・装う」「食べる」「住まう」「くらす」「作る・商う」「はぐくむ」「記す・残す」の七つのテーマに分けて展示します。資料は、往時のくらしを生き生きと語ってくれます。

特別展記念講演

日時　六月一四日（土）　午後二時～四時

テーマと講師

○「生活資料を収集・保存・展示する意義」

林　英夫氏（立教大学名誉教授）

○「雑司が谷の昔――私の少年時代――」

菊池英樹氏（菊池寛記念館館長）

会場　資料館研修室、入場無料、先着四〇名

シリーズ　地名の話　第四回

雑司が谷

雑司が谷の地名の由来は、『新編武蔵風土記稿』で紹介されている①法明寺等の雑司料であった、という説と、②禁中の雑士が南北町期に土着して名付けられた、という二つの説が流布しています。

「ぞうし」という音には、蔵主・僧司・曹子などがあてられていますが、類似の地名としては雑色・雑敷・雑式などがあります。いずれも類例の少い地名で、明治期で七例ほどしか確認できません。このうち、武蔵を中心とする関東で五例と多いことが特徴です。

蔵敷と書かれた例は、倉庫の立地として説明されますが、これは、やや字義に引きずられた感がいなめません。それよりも、多くの例は雑色に結びつけられて説明されています。つまり、寺社の料所としてあり、その下級の役人（中間・小者）である雑色の居住地、もしくはその関連地とされるも

生活資料所在調査

本年度は長崎地区

―7月17日 本調査スタート―

本年度の生活資料所在調査は、昨年の高田・雑司が谷に引き続き長崎地区（現目白5、長崎、南長崎、千早町、要町、高松、千川）を対象として行われます。

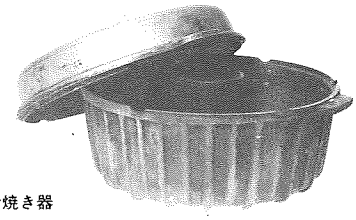
農　具

旧長崎村、長崎町とうつりかわり、昭和七年（一九三二）に豊島区に組み入れられたこの地域は、畑作中心の近郊農村として発達してきました。茄子、大根、麦、トウモロコシなどが盛んに作られました。昭和三〇年ごろを最後に農地は姿を消してしまいましたが、当時農業を営まれていた方が何人か健在な現在、豊島の近郊農業の様子を知ることのできる農具が確認されることが期待されます。

また、農具のほかにも、昨年高田・雑司が谷でみつかったような、たらい、洗濯板、二重まわし、豊島師範付属小学校の制服、七輪、お鉢と網代蓋、柳こうり、手回し式蓄音機などのような古い生活道具も確認されることでしょう。

アトリエ村

現在の長崎二・三丁目付近には、一九三一年頃からアトリエ村が形成され、芸術家たちが住みました。今回の調査では、アトリエ村に関する資料も期待されています。



パン焼き器

企画展 戦中・戦後の区民生活II

特別展に引き続き、七月二日（水）から八月一六日（土）まで、企画展「戦中・戦後の区民生活II」が開かれます。期間中の七月二日から一一日までの間、勤労福祉会館六階では、広島の原爆資料を中心とした「平和展」が併せて開催されます。これにともない、資料館では、七月五日、一九日、二六日、八月二日、九日の五回にわたって講演会「非核宣言都市への豊島のあゆみ」を企画し、戦争の悲惨さ、非核、平和の大切さをうったえていきます。

なお、展示替えのため、六月二三日から七月一日の間、資料館は閉鎖です。ご注意ください。

のです。これは、一応妥当だと思われますが、その場合、関連のさせ方が問題でしょう。

そこで、豊島区雑司が谷の場合ですが、先ず雑士（雑色も同じ）の土着という説は伝承でしかない点に不安があるのと、呼称・地名の付方として観点のすわり方が悪く、賛同できません。また、料所というのも、近世の御料・法明寺料の由緒から類推された感があります。

しかし、結論からいうと、料所であったことは間違いありません。ただし、「雑司が谷」が中世からの呼称であったことを考えると、料所は田地を中心に編成されるのが一般的ですから、その点、雑司が谷は必ずしも適地とは言えません。

そこで、『新編武蔵風土記稿』の二つの説を少しはなれて、ゾウシの意味が問題となりますが、全国的にゾウジは、蔬菜・青物を指す民俗語として定着していることが注目されます。つまり、雑事の転化です。ここから推して、ゾウシヶ谷とは、料所ではあるが、野菜等のゾウジを納める料所であった、このように考えた方が関東に多い雑色・雑司を説明しやすいのではないかと思われます。

（蔵持重裕）

図絵にみる庶民生活　第四回
―「江戸名所図会」の世界―

本浄寺は、雑司が谷一―五一に現存する日蓮宗の寺です。この絵が描かれたのは、天保七年（一八三六）ごろのことで、当時の雑司が谷あたりは、のどかな田園の情景をみせていたことがわかります。護国寺・本浄寺の境内など、いくつかの森が田畑の中に点在しており、これらを結ぶ道は、農道でもあります。左下の道には、鍬を肩にかついだ人が歩いて行くのがみえます。また、その上の方には、田の中で働いている人の姿も描かれています。

その近くの護国寺裏門の前には、何人かの人が集まっています。

護国寺裏門と本浄寺を結ぶ一本道の上にも、人が歩いているのがみられます。このへんが現在の放射二六号のあたりでしょうか。

右上は、護国寺（現文京区）境内の一部です。薬師堂、地蔵堂などが建ち並んでいるのが見えます。そして、そのまわりに、参詣の人々が群集していて、賑やかそうです。絵の右下の一本道は、護国寺から本浄寺へ続いています。この道の上にも、参詣や旅の途中と思われる人が歩いて来るのが見られます。

天保の頃の雑司が谷が、江戸近郊の農業地帯として、また郊外の行楽地として賑わっていたことがこの絵から生き生きと伝わってきます。

見学者の声―入館票より―

少しむずかしかったので、かるたを買ったので、おぼえよう。（8歳　男）

古文書等の展示がほしい。（64歳　男）

なつかしく思いました。（50歳女・35歳男）

ちょっと展示物がすくない。（11歳　男）

昔のかなづかいがよく読めず、困りましたが、私の知らないことばかりが展示されていて、勉強になりました。（59歳　女）

後記

6月3日～22日「高田・雑司が谷の生活資料展」、7月2日～8月16日「戦中・戦後の区民生活II」、7月17日～8月3日「長崎地区の生活資料調査」、6月8・29日「史跡散歩・谷端川」そして7月5日スタートで5回連続公開講演会「非核宣言都市への豊島のあゆみ」と、館主催事業がめじろおしです。5号は、〝宣伝特集〟になってしまいました。皆さまの参加をお待ちしています。

かたりべ
・
No.5
・
1986年5月30日
発行
・
豊島区立郷土資料館
・
豊島区西池袋2－37－4
・
電話03-980-2351

豊島区立
61.5.30
郷土資料館